

# 被爆体験

井手 キヨコ

私は昭和十八年、卒業四日後に日赤徳島支部から召集令状を受け、第五百救護班の一員として長崎県大村海軍病院（現長崎中央病院）へ派遣された。

十九年初期ごろまでは、あまり空襲もなく勤務の合間を利用し、交替で衛生兵や軽症の患者さんたちと自給自足のため、近くの山を開墾して馬鈴薯（ばれいしょ）を植えたり、田んぼをつくり、田植えなどもしたりしていた。

そのうちだんだんと空襲がひどくなり、防空壕へ走り込む回数も増え、九州地方も「戦地勤務だ」と、同僚

と口にするようになってきた。

そして八月九日、ピカッと閃光（せんこう）が走り、ドドーンと大爆音、同時に病棟の窓ガラスは割れて落ち「空襲警報発令総員退避」と繰り返すスピーカーの声に、早速、私たちは重要書類、救急袋、防毒面を肩にして防空壕へと走り込む。

初めて体験したあの閃光と爆音は一体何だったんだろうと話しているうちに、警報は解除となり、外へ出てみると、長崎市の上空には真っ黒な煙がモクモクと不気味に上がっていた。

しばらくすると、長崎市に新型爆弾が投下され、市内は焼け野が原と

なり、全滅で音信不通というニュースが入り、軍医、衛生兵、看護婦で救護隊を編成して出発。残りの者は患者収容の準備にかかる。

日暮れとともにトラックなどで次々と被災者が運び込まれ、病棟の入口は、身動きも出来ないほどになる。

「私も、私も」と助けを求める人。男女の区別さえもつかない顔は、真っ黒。衣類か、皮膚かわからないように焼けて垂れ下がっている。

ガラスの破片が体中に突き刺さり「痛い、痛い」「水、水」「おかあさん、おかあさん」と叫びながら、息を引き取る人も少なくなかった。その苦痛を訴える人々の姿は、まさに生き地獄そのもので、今でも鮮明に私の脳裏に焼き付いている。

処置中も、何度か警報の放送が流れた。その都度に「この人たちと